

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 松浦寿夫



学位申請者 メッシーナ・ラウラ

論文名 *Mondi materiali* Uno studio comparativo del concetto di materialità nelle opere di Ogawa Yoko

(マテリアル・ワールド—小川洋子作品における「もの」概念の比較研究)

〈審査概要〉

本論文の公開審査は2017年2月16日15時から、本学事務棟中会議室で行われた。審査委員には、本学から和田忠彦教授（主任指導教員）、林和宏准教授、村尾誠一教授、また、外部から土肥秀行立命館大学准教授をお招きし、主査は松浦寿夫が務めた。

審査では、まず最初に、学位申請者のメッシーナ・ラウラ氏より、きわめて詳細な博士論文の概要が、きわめて明晰かつ正確な日本語によって提示され、その後、各審査委員からの講評と質疑応答が日本語で行われた。そして、審査委員会は全員一致で、本論文ならびに、最終試験での質疑応答を高く評価し、申請者に対して博士（学術）の学位を付与することが適当であるとの結論に達した。

〈論文概要〉

本論文は現代日本を代表する作家の一人である小川洋子の作品を研究対象としてイタリア語で執筆された論文である。改めて指摘するまでもなく、小川洋子は日本においてばかりでなく、西欧諸国（とりわけフランス）においてもきわめて著名な作家であるが、これまで、日本語においてさえ、十分な研究がなされることのなかった作家でもある。身体の一部に対するある種のフェティシズムの様態が曖昧に指摘される点に留まる曖昧な印象の記述が、これらの先行研究の限界となっていた。このような研究の文脈において、本論文の画期的な点は、小川洋子の作品に現れる無数の事物の記述にもっぱら注目することによって、この作家の作品群の特殊な構造をまったく新しい視点のもとに分析した点にある。この点で、すでに本論文は一般的な小川洋子像を一新するきわめて優れた学術的な貢献たりえている。また、本論文がその戦略的な構成によって、同時代の西欧の文学作品、美術作品との比較文学、比較文化的な視点からの分析によって、小川洋子という作家の作品が内包する問題群を世界性の水準に位置づけ、いわば日本語による執筆活動を遂行するこの作家を〈世界文学〉の作家の一人として記述する条件をきわめて明晰に提示しえたという

点でも、重要な学術的貢献でありえている点を強調しておきたい。

論文の構成は以下の通りである。

序論

第1章 *La passione per le cose: l'ossessione feticista, i musei e la collezione*

(事物への情熱：フェティシズムの妄想、博物館、収集)

第2章 *Ciò che rimane, ciò che sparisce*

(残るもの、消えるもの)

第3章 *Lode all'inutilità. Il valore del superfluo in Kusuriyubi no hyohon e Saihate akedo*

(不要性礼讃：「薬指の標本」と「最果てアーケード」における剰余価値)

第4章 *All'interno delle cose: dare forma a ciò che non esiste*

(事物の内側で：存在しないものに形を与える)

結論

本論文は、小川洋子の小説の分析を、もっぱらこの小説家が記述する様々な「もの」の側から遂行することを目的としている。序論において、数少ない先行研究において、この小説家の作品に頻繁に現れるフェティシズムの様態への言及があるとしても、また、このフェティシズムの概念それ自体が必然的に「もの」との関連を有するとはいえ、この小説家の作品におけるおびただしいほどの事物の記述、また事物の作用に関する組織的な研究がまったく存在しないことを確認すると同時に、本論文の全体的な構想が提示されている。

この全体的な枠組みの提示に続く第1章は、本論文で反復的に論じられることになるいくつかの主題群と、その分析に際しての理論的な枠組みの提示が行われている。まず最初に、現代フランスの作家、ジョルジュ・ペレックの「超=日常的なもの (*l'infra-ordinaire*)」という概念に依拠して、あまりにも日常的であるがゆえにわれわれの視線から脱落することになる無数の事物、出来事への視線の集中という試みとして、小川洋子の作品群からの事例を記述する可能性を検討している。そして、この超=日常的な事物への視線の様態それ自体に注目することから必然的に、フェティシズムという概念と視線の概念の検討が重要な課題となることは、改めて指摘するまでもない。本論文ではとりわけアルフレッド・ピネとフロイトによる精神分析的な意味でのフェティシズムの概念が詳細に検討され、自らの手に届かないものへの関係の創設という点で、この概念がある種の暴力的な次元を備えていることに注目している。

そして、この欲望の部分対象との関係が視覚的な次元で成立する局面においては、必然的に、視線が欲望の対象に対してどのような関係を創設するかは重要な課題となる。そこで、本論文ではゴダールの映画作品『軽蔑』における女性の身体の視線による細分化の場面の分析から検討が始まり、ピエール・デレルムの『ビール最初の一杯』、ピエール・ミションの『極小の生』といったフランス文学の作品における細部への関心の様態の例の

検討が続く。他方で、欲望の対象と視線との特殊な関係を構成するモデルとして、ショーウィンドウのガラスの存在も注目すべき対象となる。というのも、ガラスはその透明性のゆえに、欲望の対象を全面的な可視性のもとに位置づけると同時に、その物理的な存在によって、この対象を欲望の主体から全面的に遮断する装置でもあるからだ。そして、このガラスの存在に注目した批評家のベンヤミンの『パリのパッサージュ』への依拠は、もう一方で、この批評家の主題群のひとつを構成する収集行為という、小川洋子にとってきわめて重要なもうひとつの主題へと導くことになる。この収集をめぐる作品として、ヴァージニア・ウルフの短編小説、「堅固な対象」、オルハン・パルクの小説、『無垢の博物館』が比較対象として検討されている。

このような一群の主題的な問題群の提示の後に、第2章では、記憶と事物との関係に注目することによって小川洋子の作品を分析する試みが提示されている。まず、最初に、ジャン＝ピエール・ヴェルナンの神話学の著作に依拠して、西欧における伝統的な「記憶」の概念を検討し、とりわけ、古代ギリシャにおける記憶の女神ともいえるムネモシユネーが体現する記憶の様態に注目する。そして、記憶の概念と事物の概念との結びつきをハイデガーの著作を参照しながら組み立てる作業がなされている。これは、小川洋子の作品群のなかに頻出する主題であるが、この章ではもっぱら、「密やかな結晶」と「沈黙博物館」の二つの作品の綿密な分析が行われている。奇妙な島を舞台とした「密やかな結晶」では、住民たちの記憶から事物が定期的に消失していく過程が描かれ、この消失に抵抗する者たちは、つまり記憶の保持を意図する住民は、この島の秘密警察によって断罪され、処罰されることになる。そして、この消失は事物に留まることなく、身体にまで及び、身体の部位が一つ一つ消失し、最後に残った声もまた最終的にはこの消失の過程をまぬかれない。ここで、事物、身体の部位の消失が、同時に記憶の消失として記述される点に注目すると、今度はまったく逆の方向で、不在の人物の記憶が事物によってしか構想されないという主題のもとに集約される「沈黙博物館」という作品が検討対象となる。いわば、どんな事物も何らかの生の部分的な痕跡として収蔵する博物館、この主題は、もはや不在の人物の生涯という形なきものに形を与える試み以外の何ものでもない。

第3章では、主として、小川洋子の「薬指の標本」と「密やかな結晶」という二つの作品に登場するに日常的な事物である、靴とタイプライターに注目し、ごく身近な事物がある種の超自然的な力を帯びる局面を分析している。しかも、これら二作品において、靴とタイプライターは人間関係の媒介作用として機能していることから、マルセル・モースの『贈与論』で展開される、贈与による拘束という事態もあわせて考察されることになる。そして、靴とタイプライターという日常的な事物が、その使用価値においてごく日常的な価値に縮減されかねないものであるとしても、あるいは毀れてしまったタイプライターのように機能的な価値を喪失した中古品、ないし廃品が、まさにこの喪失のゆえにもうひとつ別の価値を帯びる点に注目し、「最果てアーケード」と題された作品に現れる中古の事

物の様相をベンヤミンの『パッサージュ論』を参照し、分析が行われることになる。

第4章では、さらに、中古品の持ちうるもう一つの価値の検討からさらに、存在しない事物の持ちうる意味の検討が行われている。この点では、小川洋子の作品との隣接性を持つと同時に、実際に共同作業も行ったクラフト・エヴィング商会の『ないもの、あります』という著作の題名が決定的な重要性を持つことになる。そして、ないもの、存在しないものに形を与えるものとしての容器、あるいは収納という行為それ自体がこの章での主たる検討対象となり、小川洋子の作品、「葉指の標本」、「また明日」、「密やかな結晶」、「猫を抱いて象と泳ぐ」が主たる分析の対象となる。そして、存在しないものを収納する容器としての事物という様態それ自体が、事物と記憶との関係の表示以外の何ものでもありえないという結論にいたることになる。さらに、このような試みの一例として、ジョセフ・コーネルの美術作品、とりわけ、箱の中に日常的な事物の断片を集積した作品が、この収納容器の問題群の具体的な実現の一例として取り上げられ、また、ブルーノ・ムナーリの「役に立たない機械」もあわせて検討されている。

〈審査の経緯と審査結果〉

最終審査では、各審査委員から高い評価と同時にいくつかの問題点が指摘された。指摘された問題点は以下のとおりである。

1. 小川洋子に関する先行研究がきわめて少ないものであるとしても、体系的に先行研究の状況をより正確に把握しておくべきである点。また、小川洋子が執筆活動を開始した1980年代以後の、同時代の日本の文学作品における事物の記述の様態を考慮にいれるべきではないか。たとえば、田中康夫の作品に見られたように、事物がほとんどすべてその記号性に還元されるかのような様相を呈する社会状況への反応の様態との関連も検討すべきではないかといった点である

2. 論文の構成に関して、第1章ににおいて本論文で行われる分析の基本的な枠組みとなりうる主題群が提示されるが、この章それ自体が、実際の分析の結論の様相を呈してしまっているがゆえに、論文の構成の仕組み、階層関係が不明瞭に見えかねず、同じ分析対象が、何度か異なった章に反復的に現れる結果となり、論文の展開それ自体の追跡に読者は翻弄されることになりかねない点

3. 比較対象とされる文学作品、芸術作品が必ずしも小川洋子の作品との同時代性の地平に存在するものではなく、およそ30年程度の時差を持つため、同時代的な問題意識の共有という観点よりも、影響関係という歴史的な視点から検討されるべきではなかったかという疑問点。

以上のような批判点からの質問にメッシーナ氏は明晰な日本語で、きわめて誠実に解答し、そして、これらの指摘を率直に受け入れ、今後の自らの研究に十分に反映させる意図を表明した。

このようないくつかの不備はあるとしても、本論文は小川洋子の作品群をまったく独自の視点から分析した最初の学術的な著作といっても過言ではなく、今後のこの作家の研究にとっては参照が不可欠なものであり、きわめて大きな学術的な価値を持ちえるものである。また同時に、この論文は比較研究という観点でも注目すべき労作となりえている。というのも、若干の時差はあるとしても、同時代の西欧文学作品との比較文学的な考察に留まらず、文学作品と映画、美術といった異なる媒体に依拠する作品との同型的な問題群の共有と、媒体の偏差による差異との関係に関してもきわめて貴重な示唆に富んだ論文であるからだ。

以上の点から、審査委員会は論文審査および最終試験の結果から、全員一致で、本論文がきわめて高度な学術的貢献であると判断し、メッシーナ・ラウラ氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。